

近代書き言葉における文語助動詞から口語助動詞への推移 『太陽コーパス』の形態素解析データによる

田中 牧郎 (国立国語研究所言語資源研究系)¹

1. はじめに

『太陽コーパス』に形態素解析を施して形態論情報付きコーパスにしていくことの有用性は、本報告書の語彙の部に収録した論文²でも述べたが、『太陽コーパス』の形態素解析済データは、語法・文法・文体の研究の領域にも新しい展開をもたらすことが期待できる。本稿では、そのデータを用いて、言文一致によって書き言葉が文語法から口語法に変わっていく過程の記述を試みたい。

近代日本語の書き言葉は、明治時代後半(20世紀初頭)に進んだ言文一致により確立した。明治時代前半(19世紀末)の書き言葉と大正時代(1910~25年ごろ)の書き言葉を比べると、大きく異なっていることが明らかで、この時代が文体史上の画期であったことは間違いない。しかしながら、この文体の大きな変化がどのように進んだのかについては、文法や語法の記述に即して十分に明らかにされているわけではない。言文一致運動を展開した作家や啓蒙家などによる文体改革の歴史や、「だ体」「である体」「ですます体」など文末表現に注目した文体類型の消長については、多くの研究があり(山本 1965・1971・1981、木坂 1976、森岡 1991、飛田 2004 など)、それらは言文一致現象の重要な一面を照らし出しているが、文法・語法の全体を見わたすと、不明な部分が多く残されている。書き言葉の文体変化の研究には、時間軸に沿った通時的なコーパスを用いることが、きわめて有益であると考えられる。

2. 『太陽コーパス』における文語体と口語体

言文一致が進んだ明治後期から大正期の書き言葉を対象としたコーパスに、『太陽コーパス』(国立国語研究所 2005a)がある。このコーパスは、約1,450万字(700万語程度)の規模の、総合雑誌『太陽』一資料だけを対象としたものではあるが、この雑誌が、ジャンル、著者、読者層の諸側面でかなり広い範囲をカバーできていることから、この時期の書き言葉の実態をかなりの程度反映していると見て、コーパス化を行ったものである(国立国語研究所 2005b)。

図1は、『太陽コーパス』に含まれる5年分の雑誌記事約3,400本について、文語体の記事と口語体の記事との数をまとめたものである(田中(2005)の表10に基づき作図)。文体の識別は、指標とする文末辞(「なり」「たり」は文語体、「だ」「です」は口語体など)を定め、各記事ごとに中心を占める文末辞が何であるかによって行った。最初の年次である1895(明治28)年では、文語記事が約95%を占めていたが、最後の年次である1925(大正14)年では、反対に口語記事が95%近くに達しており、文語体から口語体へという推移をこのコーパスによって調べることができる。

¹ mtanaka@ninjal.ac.jp

² 田中牧郎「明治後期から大正期の語彙のレベルと語種 『太陽コーパス』の形態素解析データによる」(本報告書所収)

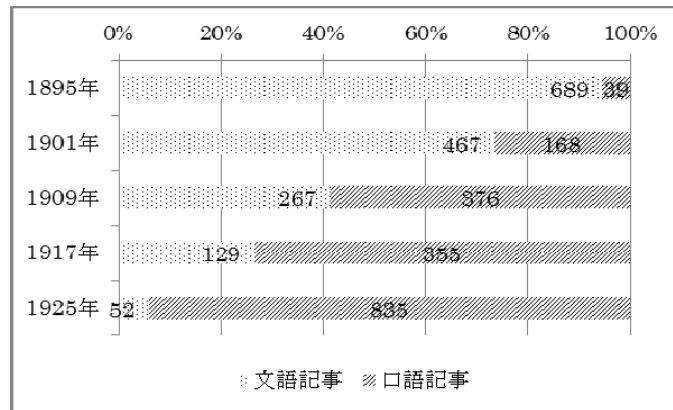


図1 『太陽コーパス』の文語記事・口語記事

『太陽コーパス』は、XML形式によって、記事単位で本文を構造化し、加えて記事本文から引用部分を切り出す構造化を施し、記事のジャンル・著者・文体、引用の話者・文体などを、XMLタグに属性として書き入れてある(田中2005)。この仕様を生かして利用することで、文語記事中の口語引用文や、口語記事中の文語引用文を区別してデータを集計していくことも可能になる。一方、『太陽コーパス』は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』などと違って、形態素解析は施されていないため、単語に区切ったデータに基づく研究は行いにくい。このため、文語法や口語法の形式の用例を収集したり、その頻度を把握したりすることは容易でなく、文語法から口語法への推移の研究は行いにくかった。これは、『太陽コーパス』開発当時は、近代語テキストに対する形態素解析技術がなかったためであるが、その後、現代語に対する形態素解析辞書「UniDic」を近代語に適用できるようにした「近代文語 UniDic」の開発が進んできており(小木曾2009)、これを用いて『太陽コーパス』の形態素解析を行うことが可能になりつつある。現段階では口語体の部分では誤解析がかなり多くなってしまふこと、文語体の部分も語や表記によっては正しく解析できない場合が少なくないなど、問題も残されている。『太陽コーパス』を形態論情報付きコーパスにしていくには、もうしばらく研究期間が必要である。

3. 各年次5万レコードの調査

前節までで述べたように、『太陽コーパス』は、文語体から口語体への書き言葉の推移を具体的に記述するのに格好の資料であるが、現状では信頼できる形態論情報が取得できないために、文語法の形式と口語法の形式を数え上げるような総合的な調査には、そのままでは利用できない。そこで、本稿では「近代文語 UniDic」で自動形態素解析を行った後に、一定量について人手で誤解析を修正し、修正した範囲のみを対象に調査を実施することにした³。

調査データ作成の具体的な作業は、次のような手順で行った。

- (1) 『太陽コーパス』各年第1号の全記事に対して、「近代文語 UniDic」と MeCab を用いて自動形態素解析を実施。
- (2) 上記の解析結果データから、各号の冒頭5万レコードをサンプルとして抽出。ただし、1895年第1号は当該部分に口語記事が多く、1901年第1号は当該部分に口語記事が皆無であり、ともに『太陽コーパス』の全体的傾向と異なるため、一部のサンプルの記事ごとに入れ替え、『太陽コーパス』の年次ごとの文体のバランスから大きくずれることが

³ この態度は、本報告書に掲載した論文、田中牧郎「明治後期から大正期の語彙のレベルと語種 『太陽コーパス』の形態素解析データによる」で、『太陽コーパス』全体の形態素解析データを対象とした態度と異なっている。この相違は、比較的誤解析が少ない自立語を対象としているか、誤解析が多い付属語を対象としているかの違いに基づいている。

表1 各年次5万レコードの調査対象の記事

年	号	記事	著者	欄	文体	ジャンル	文字数	備考
1895	1	〈扉〉	*	*	文語	***	737	
1895	1	太陽の発刊	大橋新太郎	*	文語	NDC051	3078	
1895	1	学界の大革新	久米邦武	論説	文語	NDC002	8093	
1895	1	戦勝後の教育	千頭清臣	論説	文語	NDC371	5865	
1895	1	戦争と文学	坪内逍遙	論説	文語	NDC901	7284	
1895	1	漢字の利害	三宅雪嶺	論説	文語	NDC811	5266	
1895	1	国語研究に就て	上田万年	論説	口語	NDC810	7200	
1895	1	事物変遷の研究に対する人類学的方法	坪井正五郎	論説	口語	NDC469	2567	
1895	1	経済的闘争	井上辰九郎	論説	文語	NDC333	5117	
1895	1	農業教育に就きて	横井時敬	論説	文語	NDC610	4593	
1895	1	対清政策	尾崎行雄	論説	文語	NDC329	8218	
1895	1	日本帝国の任務	中西牛郎	論説	文語	NDC311	4362	
1895	1	京都の新案内記	中川四明	地理	文語	NDC291	7354	
1895	1	紀元前の著名なる航海者	森田思軒	史伝	文語	NDC209	4458	途中
1901	1	〈扉〉	*	*	文語	***	149	
1901	1	明治三十四年	*	太陽	文語	NDC302	2171	
1901	1	昨冬の露帝	有賀長雄	論説	文語	NDC288	3509	
1901	1	学政振張と財政	久保田讓	論説	文語	NDC373	5767	
1901	1	韓国移民論	加藤増雄	論説	文語	NDC334	3198	
1901	1	欧州農業界の大勢を論じ延きて我国農業の前途に及ぶ	横井時敬	論説	文語	NDC612	5798	
1901	1	文明批評家としての文学者(本邦文壇の側面評)	高山樗牛	論説	文語	NDC901	9757	
1901	1	永遠平和の基礎を樹つるの道	国府犀東	論説	文語	NDC319	4977	
1901	1	大学派の政治的系統	*	人物月旦	文語	NDC377	5880	
1901	1	文芸時評	大町桂月	文芸時評	文語	NDC904	13782	
1901	1	政治時評	国府犀東	政治時評	文語	NDC312	9001	
1901	1	社会の腐敗救済意見	*(筆記);清浦奎吾(談)	名家談叢	口語	NDC154	4162	
1901	1	社会の腐敗救済意見	岡部長職	名家談叢	口語	NDC154	1620	
1901	1	社会の腐敗救済意見	石黒忠憲	名家談叢	口語	NDC154	1361	
1901	1	社会の腐敗救済意見	久保田讓	名家談叢	口語	NDC154	1658	
1901	1	社会の腐敗救済意見	戸水寛人	名家談叢	口語	NDC154	3404	
1901	1	宗教時評	龍山学人	宗教時評	文語	NDC162	5183	途中
1909	1	政治家の分類	*	時事評論	文語	NDC312	10387	
1909	1	大流小流	*	時事評論	口語	NDC329	1888	
1909	1	小是非	*	時事評論	文語	NDC304	1104	
1909	1	大谷光瑞法主	西湖生(筆記);鳥谷部春	人物月旦	口語	NDC188	7006	
1909	1	新刑法に就て	鶴沢総明	論説	文語	NDC326	11075	
1909	1	大同派の威嚇	*	*	文語	NDC312	204	
1909	1	清国多難の秋	竹越三叉	論説	口語	NDC302	15281	
1909	1	列国外交機関と我外務省	望月小太郎	論説	文語	NDC319	5523	
1909	1	社会の変遷と信仰問題	姉崎嘲風	論説	口語	NDC316	11992	
1909	1	英米緋名の起原	*	*	口語	NDC832	295	
1909	1	清国の真相 清国の革命党	犬養毅(談)	論説	口語	NDC312	4669	
1909	1	清国の真相 支那政治家と支那国民	高田早苗(談)	論説	口語	NDC312	2588	
1909	1	清国の真相 清国の陸海軍	大原武慶(談)	論説	口語	NDC392	2751	途中

1917	1	挙国一致の外政策	浮田和民	*	口語	NDC319	9244	
1917	1	講和乎恒久戦争	浅田江村	*	口語	NDC329	6636	
1917	1	海軍更迭短評	*	*	口語	NDC397	1910	
1917	1	政界の表裏 内大臣問題一新大臣月旦	無名隠士	無名隠士夜話	口語	NDC312	10191	
1917	1	法曹漫語	日東	*	口語	NDC327	2186	
1917	1	恋愛の破産時代	内田魯庵	案頭三尺	口語	NDC152	10965	
1917	1	時事俳句 その日その日	渡部霞亭	*	文語	NDC911	535	
1917	1	心頭雑草	与謝野晶子	婦人界評論	口語	NDC914	7677	
1917	1	一九一七年の国際経済	堀江帰一	経済財政時論	文語	NDC333	8000	
1917	1	戦時欧米産業界の活動	記者(文責); 鶴見左右雄	*	口語	NDC333	10481	
1917	1	正貨と我が財政経済	神戸正雄	*	口語	NDC337	9421	途中
1925	1	昨年の今月	*	*	文語	NDC302	688	
1925	1	近代文明と発明	阪谷芳郎	*	口語	NDC507	7465	
1925	1	近代兵器の進歩並に将来の趨勢	大橋順四郎	*	口語	NDC559	8551	
1925	1	鼻で見、指で聞く少女	牧田環	*	口語	NDC147	4113	
1925	1	歴代の総理大臣(一)	三宅雪嶺	*	口語	NDC312	2643	
1925	1	現代の女性美	斎藤佳三	*	口語	NDC701	3428	
1925	1	政界煙話	鬼谷庵	*	口語	NDC312	4696	
1925	1	阪神船成金の今昔	乱峰子	*	口語	NDC332	2737	
1925	1	最近に於ける飛行機の発達	長岡外史	*	口語	NDC538	9060	
1925	1	官界から実業界に入りて	白仁武	*	口語	NDC335	2094	
1925	1	近世畸人伝 老鉄と鬼助	村松梢風	*	口語	NDC289	4065	
1925	1	貸金庫とはドンなものか 東京では日本興銀と三菱	記者	*	口語	NDC338	3553	
1925	1	生活上に於ける差別撤廃論	三輪田元道	*	口語	NDC361	10622	
1925	1	明治初年外交物語(その四)八太郎の虎の巻	豹子頭	*	口語	NDC210	7695	途中

「」は記載がないもの。「***」は分類不能。備考欄の「途中」は、各年次5万レコードに達したところまで。

ないよう調整した。サンプルとした記事は、表1の通りである。なお、今回のサンプルには結果的に小説類は一つも含まれなかった。

(3)サンプルとして取り出した、各年5万レコード(全体で25万レコード)について、人手で誤解析を修正。この修正によってレコードが増減することがあり、また、自動解析結果のデータには、記号や空白も1レコードとして出力されるので、実際は各年次5万語よりも少なくなる。

(4)上記の25万語弱について、同語異語判別を実施した後、品詞が助動詞と認定されたデータをもとに、年次別の助動詞頻度表を作成。

4. 助動詞の頻度

4.1 助動詞全体の概観

以上の手順で作成した助動詞頻度表が、次頁の表2である。表2に至る前の段階の処理作業にあたっては、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の形態論情報規程集(小椋ほか2011)を参照した。この基準は、形容動詞を立てないため「勤勉だ」の「だ」などは、助動詞「だ」に扱う。また、推量の助動詞「う」はなく、活用語の意志推量形と認定される。なお、例えば「らしい」と「らし」のように口語助動詞と文語助動詞とが用例上区別しにくいものについては、筆者の判断でどちらかにまとめた(「らしい」「らし」の場合は「らしい」にまとめた)。また、断定の助動詞が「なら」の語形を取った場合は、「だ」の仮定形とはせずに、すべて「なり」の未然形と扱った。

表2を概観すると、を付けた口語助動詞の多くは、後ろの年次で新たに出現したり、

年次が進むにしたがって増加したりする傾向を示すものが多い。一方、 を付けた文語助動詞は、後ろの年次では姿を消したり、年次とともに減少したりするものが目立つ。全体的に見れば、文語体から口語体へという書き言葉の変化が、助動詞の消長に現れていると見ることができる。一方で、口語助動詞のすべてが同じように登場したり増加したりするわけではなく、また、文語助動詞の消失や減少の時期やペースも語によって多様である。このことから、文語体から口語体への移行にあたっては、個々の助動詞において様々な事情があったことが推測され、そのような細部に分け入った記述研究が必要とされると言えるだろう。

表2 『太陽コーパス』形態素解析データ各年次5万レコードにおける助動詞の頻度

意味	語彙素	1895(明 28)年	1901(明 34)年	1909(明 42)年	1917(大 6)年	1925(大 14)年	計
断定	●じゃ				21	1	22
	●だ	171	130	737	1019	1385	3442
	○たり-断定	154	148	132	104	42	580
	○なり-断定	930	1226	684	585	465	3890
丁寧	●です	3	6	1	52	8	70
	●ます	183	63		76	60	382
	●やんす	1					1
過去・完了	○き	148	243	59	26	14	490
	○けり	15	5		2		22
	●た	50	48	499	702	926	2225
	○たり-完了	242	219	194	70	11	736
	○つ	4	2	1		2	9
	●てる			1	10	11	22
	○ぬ	22	30	9	2	1	64
推量	○り	236	248	133	78	59	754
	○なり-推定	2					2
	○べし	415	406	255	167	48	1291
	○む	258	261	106	97	30	752
	○めり	1					1
	らしい		1	1	4	4	10
否定	○らむ	1			1		2
	○非ず		5				5
	○じ	5	11				16
	○ず	860	883	501	428	193	2865
	●ない	5	14	71	150	167	407
	●まい		3	9	23	12	47
受身	○まじ	1	2	1	1	0	5
	られる	71	127	138	106	66	508
使役	れる	92	47	68	171	187	565
	させる			1	4	1	6
	○しめる	104	89	73	60	27	353
比況	せる	9	13	6	25	26	79
	○ごとし	151	204	189	146	39	729
希望	●たい	5	5	3	11	53	77
	●たがる		1			2	3

は口語助動詞、 は文語助動詞、 も もないものは口語・文語に共通する助動詞。

4.2 断定の助動詞、過去・完了の助動詞の消長

細部を研究するための第一段階として、表2に示した助動詞のうち、文語助動詞から口語助動詞への交替の様相が明瞭に現れている、断定の助動詞、過去・完了の助動詞を取り上げてみよう。まず、頻度の低い(総頻度30未満)助動詞について、簡単に見ておこう。まず「じゃ」は、1909年まで皆無で1917年にはじめて出現する。「てる」も、同じように前半の年次には無く1909年から現れる。これらの口語助動詞は、口語記事が多くを占めるようになったことによって書き言葉に使われるようになったものである。文語助動詞のうち「けり」「つ」は総頻度が低い、どちらかという前半の年次に多く、後半の年次に少ない。これらは、文語記事が減少するにつれて、姿を消していく流れにあったものと考えられる。

断定の助動詞、過去・完了の助動詞それぞれの主要なもの(総頻度30以上の語)の年次別の頻度の推移をグラフにまとめたのが、図2および図3である。

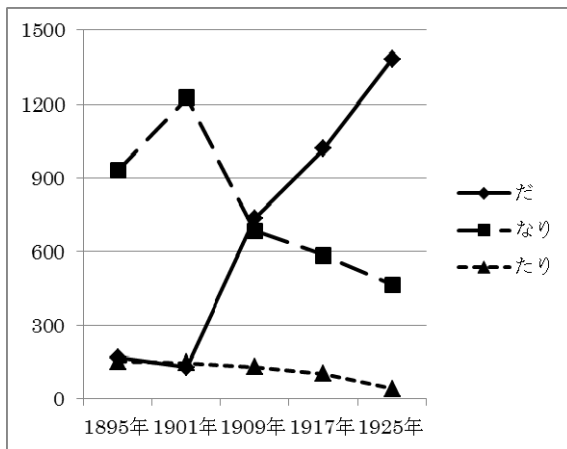


図2 主要な断定の助動詞の頻度

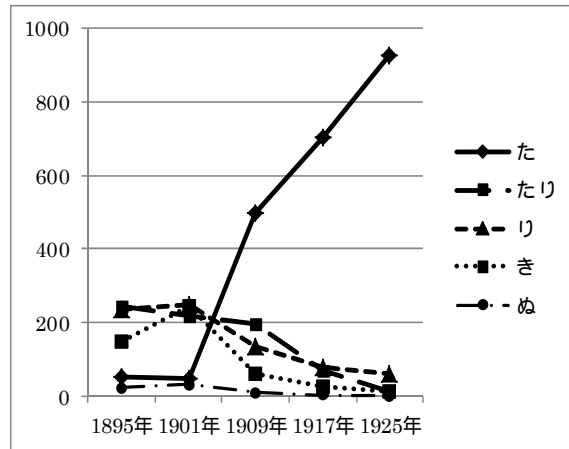


図3 主要な過去・完了の助動詞の頻度

断定の助動詞については、図2から次のようなことが読み取れる。まず、「だ」が1901年から1925年まで急速に増加し、反対に「なり」「たり」は1901年から1925年まで減少が続く。1895年と1901年の間では「だ」はわずかに減少、「なり」はわずかに増加、「たり」はほとんど変化がない。1901年以降、文語助動詞「なり」「たり」から口語助動詞「だ」への交替が進むが、口語助動詞の増加の速度に比較して、文語助動詞の減少の速度は緩やかであり、1925年においても、「なり」は高い頻度を保っている。

次に、過去・完了の助動詞については、図3から次のようなことが読み取れる。「た」は1901年以後急増し、反対に「たり」「り」「き」は1901年以後減少傾向が続く。1895年から1901年へは、「た」「り」「ぬ」は不変、「き」は微増、「たり」は微減という状況である。断定の助動詞と同じように、1901年以降、文語助動詞から口語助動詞への交替が進むが、口語助動詞の増加の勢いに比べて文語助動詞の減少の傾きは緩やかで、「り」のように1925年に至っても、ある程度使われ続けるものもある。

このように、口語助動詞の増加の速度に比べて文語助動詞の減少の速度は緩やかであることは、断定の助動詞と過去・完了の助動詞とで共通している。また、断定の助動詞、過去・完了の助動詞の内部においては、個々の助動詞ごとに増え方・減り方は様々であり、こうした個別の変化を詳しく見ていく必要性が高いことが確かめられる。以下、本稿では、断定の助動詞を事例に取り上げて、さらに詳しい分析を行うことにする。

5. 断定の助動詞の分析

5.1 「だ」の頻度推移

まず、「だ」の発達過程を見ていこう。図4は、「だ」の活用形ごとの年次別の頻度の変

化が分かるように、折れ線グラフに示したものである。

すべての年次で連用形「で」の頻度が最も高く、その1901年以降の増加傾向も著しい。「で」の後に直接続く語について、やはり年次別の頻度をグラフに示すと図5のようになる。他に「ね」「の」に続くものや、形容詞に続くものが数例あるが、グラフでは省略した。どの年次においても「ある、ござる」が最も多く、その増加傾向も顕著である。連用形「で」の増加は「である」の伸張による面が強いことが分かる⁴。「だ」の全体頻度が増加する1909年からは、連体形「な」と終止形「だ」の増加も目立ってくる。少数だが、未然形「だろ」⁵、連用形「だっ」も、1909年あるいは1917年から見え始める。

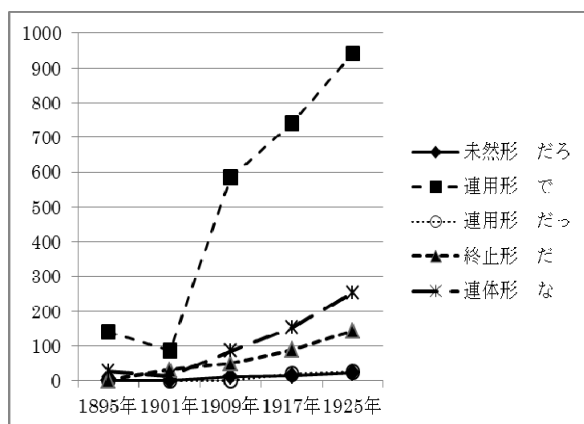


図4 「だ」の活用形別頻度

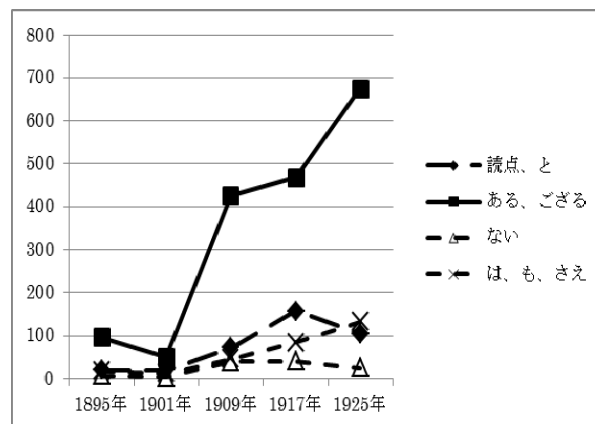


図5 連用形「で」の後接形式

大決心を有つ者であります。(1895年1号・上田万年「国語研究に就て」)
 平和の破壊であつて平和の手段でない(1917年1号・浅田江村「講和恒久戦乎」)
 或意味に於ては帝國海軍の慶事で、(1917年1号・*「海軍更迭短評」)
 斯様な不都合な外交を遣るものは(1909年1号・*「大流小流」)
 人生を觀じて樂觀だの悲觀だのとさわぐ(1909年1号・姉崎嘲風「社会の変遷と信仰問題」)
 ツマリ富谷君に關係があるのだ、(1917年1号・日東「法曹漫語」)
 政治的に餓死せねばならぬ時であるだらうと思ふ。(1909年1号・竹越三叉「清国多難の秋」)
 已代治は桂内閣の軍師だつたが、(1917年1号・無名隠士「政界の表裏 内大臣問題」)

5.2 文語文に姿を現す「だ」

上記のような「だ」の伸張は、口語記事が増加していくことによるものであり、「だ」のほとんどは口語文中で用いられている。一方、わずかではあるが、次のように文語文中に顔を出した「だ」がある。今回の調査範囲では6件のみである。

瑣細な質問の蒼蠅(うるさき)を嫌い、因て學者の群に入ることを避たり。(1895年1号・久米邦武「学会の大革新」)

普通の秀才位では、到底こゝに達する能はず(1901年1号・大町桂月「文芸時評」)

6件中4件が、第1例のように連体形「な」であり、多くの年次の多様な記事に点在している。全体では少数派の連体形「な」の場合に文語文中でも口語助動詞が現れやすいの

⁴ 「ある、ござる」のうち、「ござる」は1895年にのみ多く、1901年以後は非常に少ない。言文一致初期に多かった「でござる体」「でござります体」が次第に減少していく流れを反映するものだと考えられる。

⁵ 「近代文語 UniDic」では、「だらう」で意志推量形と判定されるが、ここでは「だろ」で未然形と扱った。

は、連体形が持つ後続の名詞との連続性の強さからそこに切れが感じられなくなり、文体が意識されなくなったからだというような事情が考えられるのではないか。残り2件は、連用形「で」で、いずれも1901年の「文芸時評」(大町桂月)の例である。これは現れる記事に限定があるため、記事の文章の事情によるものかもしれない。このようにごく一部に例外的な現象があるものの、原則として、文語文中には口語助動詞は現れないと見ることが許されよう。

5.3 「なり」「たり」の頻度推移

図6は、「なり」の活用形ごとの年次別頻度の推移が分かるようにグラフに示したものである。当初1895年及び1901年では、終止形「なり」、連用形「に」、連体形「なる」が多く、未然形「なら」、已然形「なれ」、連用形「なり」は少なかった。1909年からは、終止形「なり」、連体形「なる」が減少し、特に終止形「なり」は急速に衰退し、1925年にはわずかになる。一方、連用形「に」はほぼ横ばいで、1925年でも300件以上使われていることや、未然形「なら」も少ないながらほぼ横ばいであることは、衰退していく全体的な流れと異なる動きとして注目される。

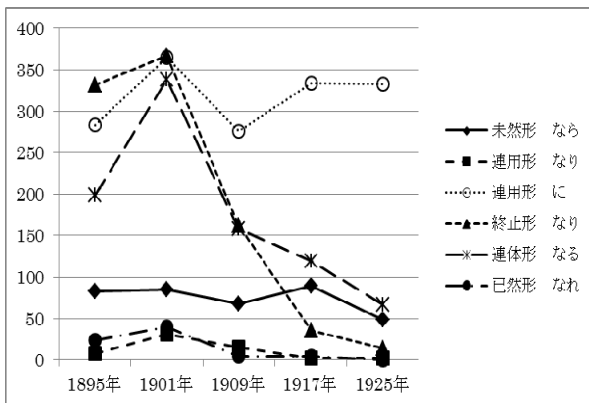


図6 「なり」の活用形別頻度

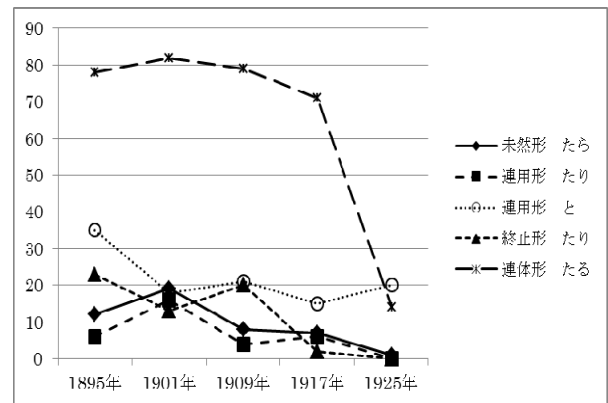


図7 「たり」の活用形別頻度

「たり」について同様にグラフにしたものが図7である。「なり」に比べて全般に頻度は低いですが、連体形「たる」だけが1917年までよく使われ、他の活用形は当初から低頻度でいずれも次第に減少していく。連体形「たる」が1925年に急速に減少すること、連用形「と」が新しい年次でも比較的多く使われ続けることは、全体的な流れと異なる動きとなっている。

5.4 口語文に生きる「なり」「たり」

5.2で見たように、文語文中に口語助動詞「だ」は原則として現れず、例外的に顔を見せた場合は何らかの特別な事情があるものであった。これに対して、口語文中に文語助動詞「なり」「たり」が現れることは多く、表3のように「なり」約1400件、「たり」200件が確認できる。

表3 口語文中の「なり」「たり」の活用形別頻度

	未然	連用形-一般	連用形-に・と	終止	連体	已然形	計
なり	187(13.5%)	5(0.4%)	882(63.5%)	48(3.5%)	256(18.4%)	11(0.8%)	1389(100.1%)
たり	15(7.5%)	6(3.0%)	49(24.5%)	8(4.0%)	122(61.0%)	0(0.0%)	200(100.0%)

口語文中の「なり」のうち、63.5%が連用形「に」、次いで18.4%が連体形「なる」、13.5%が未然形「なら」であり、他の活用形は少ない。

元老を攻撃するなどは餘りに下品ぢや。(1917年1号・無名隠士「政界の表裏 内大臣問題」)

彼様なる別が有るものでござります(1895年1号・坪井正五郎「事物変遷の研究に対する人類学的方法」)

其面目を一新すると云ふ意味に外ならぬのである。(1909年1号・西湖生「大谷光瑞法主」)

若し是が女王でなかつたならば、(1909年1号・竹越三叉「清国多難の秋」)

これらのうち、連用形「に」と未然形「なら」は、口語助動詞「だ」に、これに直接相当する用法がない。このために、文体が口語体になっても文語法が生き続けることになったものだと考えられる。口語文法においては、形容動詞や助動詞「だ」の連用形に「に」を、同じく未然形・仮定形に「なら」を配して、これら生き続けた文語法を口語法の中に組み入れている。口語文に生き残った語法と見ることができよう。これに対して、連体形「なる」には、同じ用法が口語助動詞「な」によっても担われている。

斯様な不都合な外交を遣るものは(1909年1号・*「大流小流」)

図6において、連用形「に」、未然形「なら」と違って、連体形「なる」は衰退傾向が顕著であったのは、口語助動詞「だ」の連体形「な」に直接対応する用法があったために、口語文が増えていくにしたがって、口語法の「な」に置き換わっていったからだと考えられる。

口語文中の「たり」の内訳は、表3のように、連体形「たる」が約61%を占め、次いで連用形「と」が24.5%であり、他の活用形は数%以下に止まっている。連体形の方が連用形よりも多いところは、「なり」の場合と逆である。

或は慨然として長息し(1895年1号・坪内逍遙「戦争と文学」)

或は漠然と數人を愛して(1917年1号・内田魯庵「恋愛の破産時代」)

決して政治家たるを得じ(1901年1号・*「大学派の政治的系統」)

帝國海軍の主力たる第一艦隊を(1917年1号・*「海軍更迭短評」)

連体形「たる」には、「なる」に対応する「な」のような口語形式がない。次のような「である」という複合形式はあるものの、「たる」と「である」の対応は、「なる」と「な」のように等価な対応とは言えない。そのことが、図7で見たような、「たる」が1917年まで衰退することなく使われ続けたことの背景にあったのではないかとと思われる。

法律學者且つ外交官であるヘンリー・ホイートン氏の(1925年1号・豹子頭「明治初年外交物語」)

同じく、連用形「と」にも対応する口語形式がないために、図7で見たように、年次が進んでも頻度を低下させずに使われ続けるのだと考えられる。この点は、「なり」の連用形「に」と同様の事情である。

6. おわりに

近代日本語の書き言葉が、言文一致を経て文語体から口語体に推移する過程を、『太陽コーパス』から取り出したサンプルにおける助動詞の分析を通して研究した。その結果、全体的には、口語助動詞が増加し文語助動詞が減少していく状況にあることが確かめられたが、その増加や減少の時期や速度は語によって様々であることも明らかになった。断定の助動詞「だ」「なり」「たり」を例に、活用形や用法の細部を分析すると、活用形や用法によって、発展や衰退が顕著なものもあれば、それがあまり目立たないものもあった。文語文中に口語助動詞が現れることは原則としてないが、口語文中で文語助動詞が使われることは多く、それは、口語助動詞にない用法を担う役割を持って口語体書き言葉にも取り入れられたものと考えられた。他の助動詞や、助動詞以外にも研究対象を広げて、近代書き言葉における文語法から口語法への推移の過程で生じた出来事を総合的に研究していくことが期待されよう。

口語体書き言葉がどのように成立していったかについての研究には、当時の話し言葉と

の対比も不可欠である。今回のサンプルには含まれていなかったが、『太陽コーパス』には小説も多く入っており、小説中の会話文の実態を分析することで、そのような方向に研究を展開させていくことが望まれよう。

『太陽コーパス』に形態論情報を加えていくことで、語法・文法・文体の研究にも大いに資することができると思込まれる。

文 献

- 小木曾智信 (2009) 『近代文語文を対象とした形態素解析のための電子化辞書の作成とその活用』(科学研究費補助金研究成果報告書、<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc> からダウンロード可)
- 小椋秀樹・小磯花絵・富士池優美・宮内佐夜香・小西光・原裕 (2011) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集 第4版』国立国語研究所内部報告書
- 木坂基 (1976) 『近代文章の成立に関する基礎的研究』風間書房
- 国立国語研究所 (1987) 『雑誌用語の変遷』(国立国語研究所報告 89、秀英出版)
- 国立国語研究所 (2005a) 『太陽コーパス 雑誌「太陽」日本語データベース』(国立国語研究所資料集 15、博文館新社)
- 国立国語研究所 (2005b) 『雑誌「太陽」による確立期現代語の研究 「太陽コーパス」研究論文集』(国立国語研究所報告 122)、博文館新社
- 田中牧郎 (2005) 「言語資料としての雑誌『太陽』の考察と『太陽コーパス』の設計」国立国語研究所 2005b 所収、pp.1-48
- 飛田良文編 (2004) 『国語論究 11 言文一致運動』明治書院
- 森岡健二 (1991) 『近代語の成立 文体編』明治書院
- 山本正秀 (1965) 『近代文体発生の史的研究』岩波書店
- 山本正秀 (1971) 『言文一致の歴史論考』桜楓社
- 山本正秀 (1981) 『言文一致の歴史論考 続編』桜楓社

付 記

本稿は、「国立国語研究所『通時コーパス』プロジェクト・オックスフォード大学 VSARPJ プロジェクト合同シンポジウム『通時コーパスと日本語史研究』」(2012年7月31日、国立国語研究所)において発表した内容に基づいている。